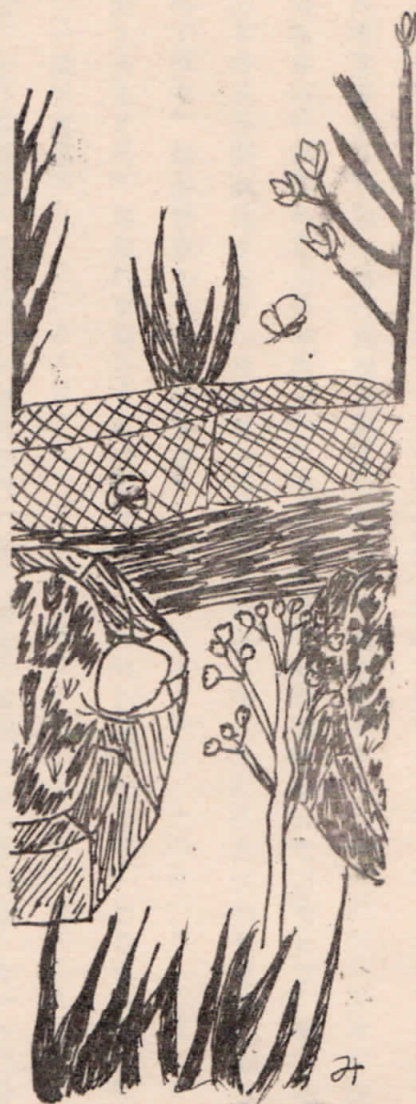




その様子は、人と人が宇宙を行き交うごとくに無重力に、手をとりあったり離れたりしているように、感じられる。人が互いに追求せず、互いを束縛せずに、さまよって行くことができるならば、このような生き方が可能であろう。しかし、私達は、いかにこだわり深く、こころ弱いものであることか。



彼 岸 花

一 寺の秋 (4) 一

彼岸花が、彼岸の頃に咲くのは、あたりまえのようで、やはり不思議に思う。早くから涼しい秋も、いつまでも暑い秋もある。それでも、寺の彼岸の法要には、毎年何茎か、赤い、火の輪が咲く。門の横、池の端、墓石の間などに、四本、五本とかたまって咲いて、燃えているという形容はあたらないが、今年は三十本くらい咲いた。

私がこの花を、はじめて見たのは、群馬県から滋賀県に移り住んだ昭和二十年、敗戦直後の秋であった。小学校の四年生、ひとり学校から帰る途中、道のわきに赤い影を見て、のぞいてみると、たった一輪の彼岸花であった。この花を知らなかった私のおどろきは、ちょうど現代の子どもが、山中にひそかに降りた UFO を見たにも匹敵する。そっと、かくすようにして、持ち帰ったのであった。

彼岸花は、形の整った、様式的な花で、しべの曲線は長く弧を描いて優美である。小学生に、この花をかかせるのと、力強く、たくましい線で描き、この花の思わぬ一面を見せられる気がする。

保育園の子どもに直接販売されている『かがくのとも一〇二号「ひがんばな」甲斐信枝さく』は大変によくできた本である。

ひがんばなは たくさんのなまえを もっています。まんじゅしゃげ きつねのかんざし はなじょうち  
ん ちんちんどうろう おみこしさん あかおに おにゆり おにかぶと かじばな ひぐるま はなびば  
な

ひがんばなは ふしぎな しょくぶつです。つちのなかのきゅうこんから によきによきと くきをのば  
し、はっぱもださず いきなり はなを さかせるのです。さきおわっても ひがんばなの はなびらは  
ちりません。しべも おちません。くきも しばらくは たったままです。ひがんばなは しべや くきに  
のこったようぶんを きゅうこんに すいもどして いるのです。

これ以上によく、彼岸花を説明する言葉があるとは、思えない。「いきなり花を咲かせる」「養分を球根に吸いもどす」など、この草の強さを、どきりとするまでに、言い得ていると思う。

きゆうこんは おおみずに おしながされても、にんげんに ほりすてられても、じりじりと つちのなかに ねっこを おろします。ながくのびた ねっこは きゅつと、ちぢんで きゆうこんを つちのなかへ ひっぱりこみます。じりじり じりじり ねっこは きゆうこんを ひっぱりつづけ、一ねんも 二ねんも かかって つちのなかに ひきずりこんでしまいます。つちにもぐった きゆうこんは また あたらしく なかまを ふやしていきます。

どんな植物のいとなみも、決して、彼岸花に劣りはしないだろうけれど、このたくましさには、何か強い意志さえ感じられる。

赤い花なら／まんじゅしゃげ／オランダ屋敷に／雨が降る／ぬれて泣いてる／ジャガタラおはる  
という、流行歌のあったのをおぼえているが、牧野富太郎博士の植物図鑑には、

曼珠沙華ハ赤花ヲ表スル梵語ニ基ク。

と記されていて、たいへん象徴的な花である。万葉集巻第十一 二四八〇

路の辺の芍師の花の灼然（いちしろ）く人みな知りぬ我が恋妻を

という歌の「芍師の花」は彼岸花であるというのも、博士のはじめて言われた説であったが、確かに証明されな  
いまま終っていた。しかし今日、松田修氏の植物文化史の研究によって、その正しいことが確かめられたとの

ことである。

北九州、小倉地方に、イチジバナ、イッシンセン、という方言が採集されたということであるが、民俗学によつてこういうことが研究されるのだということは、大変に興味深いことであつた。

ひがんばなは もえあがるような うつくしさ ちからづよさで むかしから おおくの ひとびとの  
ころを ひきつけて きました。 ::

たんぼばな きつねのたいまつ のたいまつ くびかざりぐさ ねこぐるま ふでばな じゆずばな  
かりばな どくばな へびばな いちじばな おばけ かつたる みちまよい じゆうごや かみなり あ  
めふらし ひいひりこっこ したまがり たこいも ちからこ しろぐわい きつねのかみそり したぬぐ  
い はみずはなみず はなしくさ いっぼんかつぼん ちんからぼん

と、『かがくのとも』の「ひがんばな」の説明は結ばれている。この本の作者の、彼岸花に対する思いには感動する。

GONSHAN GONSHAN 何故泣くる

赤い御墓の曼珠沙華（ヒガンバナ）

曼珠沙華

けふも 手折りに 来たわいな

GONSHAN GONSHAN 何故泣くる

何処まで とつても 曼珠沙華

曼珠沙華

恐や 赤しや まだ七つ

北原白秋の詩が歌われるのを、これも小学生の頃ラジオで聞いた。敗戦の、しらしらと空しい、秋の日本に、彼岸花はやはり象徴的であつたと思う。  
(一九八四年十月 カット・原田道子)

上原 淳 道 『私 は なぜ 外 国 に 行 か な い か』 1985 4 12 憲雄

四月八日、『関東学院大学文学部紀要』第四三号の抜刷をいただきました。一九八三、四年度の講義案に始まる八章を読み了って、あなたのお付合いが二十年以上になるのだなあ、と思い、二十年付合っても、淡として水の如きへ君子？のゝ交りのせい、わたしのウカツのせい、わからないことがいっぱいあるのだなあ、といささか感慨をもよおした次第です。国立大学の教員が中国に留学できなかった具体的原因。これはあなたの『読書雑記』を注意しておればわかったはずなのに、読むしりから忘れ、国家公務員の身分に無関心だったことなどからして、いま読んで、そうだったのかと驚きました。一度行った郵便局には二度と行かないようにする、という奇抜な実行が、いつかのお便りにあつた「無駄」の一つにはいつていようとは、まったく想像もできないことでした。この感想は、あなたの「外国認識の方法」論につながります。へ上原君へ二十年もへ留学しながら、

しつかりした方法論をもたぬわたしには相手国のことがてんでつかめてないではないか、というふうに。だがまた、この論文を読んでその大綱に納得がいくのは、『読書雑記』をはじめ、上原さんの書かれたもの読まれるものの幾分かを、わたしも読んできたことによるのだろう、というふうに。軽薄なわたしは、自分の書いたものを、しばらくたって読み返すと、軽薄が鼻について、うんざりします。これも、上原さんのような視点から絶えず照射されているという反省によるのかもしれない。反省はしても、すぐ忘れて軽はずみなことを口ばしる。そんなときに、この論文を取りだして読み返さねば。：この程度の感想を聞かされるのでは、聞かされた方がっかりなさるでしょうが、お許しください。

浣 溪 沙 一 半 一 (一 二) 一

原 田 憲 雄

狭庭にむかふ窓のべに春の色濃し／ふたへの簾まきもせて影ひそかなり／たかどのにも言はず搔いなる  
琴／遠き峰より雲出でてうすづきそめぬ／そよ風は雨吹きてかけにたはむる／梨の花ちらむとすたへがた  
きかな

唐の教坊曲、遊里でうたわれる歌詞から始まった。四十二字、前段三平韻、後段三平韻。清照はほかに二首この調の詞を作っているが、今はこれだけとりあげる。

小院閒窗春色深。

Xiǎoyuàn xià chuāng chūn sè shēn.

「小院」は小さな庭。それがどんな庭かは（八）に記した。その次の二字は閑窓と同じ。しずかなまど、である。しずか、といっても、わびやさびの方向より、におやかな、つやめいた方向で使われることが多い。春色深とくれば、その窓のうちの人は女、ということになる。

重簾未捲影沈沈。

Chónglián wèi juǎn yǐng chénchén.

「重簾」は二重のすだれ。訳にもそうしておいたが、実際に二重であるかどうかにかかわらず、奥深くにいること、たれこめて、といった状態にすることを重簾まかずと表現する。「影」はかげぼうしではなく、人のすがたそのもの。「沈沈」はひっそりというほどのオノマトピア。

倚樓無語理瑤琴。

Yǐlóu wúyǔ lǐ yáocín.

楼は二階。そこから女が顔をのぞかせて道ゆく青年を見る、といった詩や小説がある。それが普通なのではない。女の人は、家族のいる一階で、いっしょにおしゃべりを楽しむ方を普通とする。二階にいるのは、普通ではなく、たれこめているのだから、外を見るのでもない。しかも、ものもいわない。そうして琴をひいている。さきもいったように、わびとかさびとかいった光景ではないが、ひいやりとした緊張が、ここにはある。緊張が何によるのかわからぬままに前段は終る。後段。

遠岫出雲催薄暮，

Yuǎnxiù chūyún cuī bómù,

「岫」は「くき」と訓じ、山のほらあな。陶淵明の「掃去來の辞」に「雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る」という有名な句がある。それを使っているけれども、ここでの岫は、ほらあな、ではな



く峰であろう。この句だけが韻をふまない。次の句との結びつきは、意味の上でも、他の句句より強いだろう。

細風吹雨弄輕陰。

xìfēng chuīyǔ nòng qīngyīn.

「輕陰」は、うすぐもり、あるいは、うすいかげ。ここでは梁の簡文帝の「如影」に「屋花斜色去り、夜樹輕陰あり」というようなかけであろう。夕暮れ、風がそよぎ、雨さえそうて、木々のかけをなぶりはじめる。

梨花欲謝恐難禁。

líhuā yùxiè kǒng nánjīn.

「謝」は別れをつけること。花なら、しほみあるいは散ることになる。梨の花が散って、いずことも知れぬ方へ去ってゆこうとする。「禁」は去声なら「とどめる」だが、ここは平声で「耐える」の意。ただ、この句ではとどめるの意もそうて、去ろうとする花を立ち止まらせようとしても止めることはできず、おそらく耐えがたい思いをしなければなるまい。というほどの意であろう。

双調といっても前後段三句の小さな作品、それぞれの句はむつかしくない。だのに全体はわかりやすいとはいえない。一本には題を「春景」とする。春景が舞台になっていることは間違いない。しかし、それがテーマとはいえない。「閨婦の心情を写出したもの」とある評家がいる。前段の琴をひく人は婦人であり、ものいわぬのは愁いをいさぐからであろうゆえ、この判断は正しい。ただ、わたしには、婦人そのものよりも、愁える婦人を見るまなざしの方が、強く感ぜられる。そうして、前段ではその視線が短かく、後段では長い。短い視線は鋭く冷たく、長い方はやわらかく、うるおいを帯びている。二つは、しかし、別の人ではなく、同じ人の時をへだててのそれであるようにみえる。この詞はある本では歐陽脩の、周邦彦の、吳文英の作とする。いずれも男性である。

その誤りであることは今日では広く承認されているようだ。編者の誤りは、単純な手違いではなく、たぶんこの視線を男性のものと感取したためであろう。その男性の視線を、もうひとつ奥の方で清照が見ていて、しかも最も表面に出たところをさらさらと描いている。構造の重層性が、この作品の奥行を深くしているのだろう。彼女の代表的な散文「金石録後序」にもその重層性があつて、わかりにくい。いざれ後にとりあげねばなるまい。

※四月十一日消印の手紙で、荒井健氏が、李清照・李賀・王礼錫につき種々有益な教示を惠投された。そのうち李清照に関するものをその趣旨のみ左に掲げ、感謝します。

『方向』二五号一八頁 李義山詩「落日無限好」↓「夕陽無限好」 三六号一八頁 「肯放」の放は使役の助字。「悶損」の損も助字の殺と同義。 三八号二頁 「猜道」の道も動詞のあとにつく助字（得と同義）とみる方がよいのではないか。「奴面」の奴は一人称と解するのが普通ではないか。

このような示教は実にうれしく有難い。さらに考えて前稿を訂したい。

（一九八五年四月十四日）

ア ス ラ ーランカーの岸辺で

(七) 一

原 田 憲 雄

びるしゃなについての前回の記事を要約・補足した上でアスラに入りたい。

びるしゃなは、サンスクリットのVairocana, Virocana, VīriのVerocanaだといわれ、太陽あるいは太陽神をさした。バラモンの伝承の中でアスラ（悪魔）とされ、仏教徒の間では仏教に帰依したアスラ、守護神、等等とし

て信仰され、やがてアラカン、ほさつ、ついには如来とされるが、その過程での系譜的位置づけに乱れがみえ、  
仏教徒の間でも明らかではなくなって、Virocanaの子とされるBaliと、同じくVirocanaの子とされたVairocana  
との関係がよくわからない。

さきに引いた南伝『大会経』では「ヴェーローチャと称するバリの子ら」とあり、このヴェーローチャはやはり  
びるしゃななのであろうが、Veroana, Vairocana, Virocanaとどうかわるのかわからない。リス・デピツの  
パーリ辞典にも水野弘元氏のそれにもVeroanaはあるがVeroaはのっていない。赤沼智善『印度仏教固有名詞辞  
典』はさすがにどちらものせてはいるが、引用経典はわたしの引いた範囲で、説明もわたしの疑問を解決してくれ  
ぬ。漢訳『大会経』の呪文の表記とさきに引いたパーリ文と、ぴったり一致するかどうかを判断する力はわたし  
にはないが、それでもたどればほぼ同じ文章らしい。もしそうなら、南伝と北伝はこの個処に関してはずべてい  
ないことになる。それをなぜ漢訳の際に呪文として音写のままのこしたのか。漢訳者は、伝道者であり、漢人仏  
徒の先生だ。訳した経につき質問をうければ答えなければならぬ。同じびるしゃなでありながらバリの父であつ  
たり子であつたり、あるいは兄弟であるかもしれない。同じものではややこしくてしかたがない。弟子というもの  
は、たぶんどこでも、教師が最も伝えたいものには上の空で、教師がさっと通り過ぎてゆきたいところに限って  
しつこく質問したがるものである。長阿含の訳された五世紀は、大乘経典が続々訳され、六十華嚴の訳出とも前  
後する。すでにびるしゃなは如来として信じはじめられている。その如来をアストラとする経をそのまま訳したの  
では説明にはなだ困難を来たすであろう。そのわずらわしさを避けるため、呪文ということにしておいたので

はないか。そこで漢訳經典をあれこれ読み返してみると、びるしゃなの音写に幾通りかあつて、如来やぼさつ  
ときは華嚴經と同じ「毘盧遮那」で、アスラときは「び」の音に「卑」を含む文字（主として車ヘンに卑）を  
使っている。過去の中国人が異民族名を音写するときケモノヘンの文字を使うのと似たやり方である。

さきにも引いたグナパドラの『雜阿含經』卷第二十二に、ラーフラ・アスラ王が月天子を障害するのに対し、  
世尊が月天子を解放してやれとラーフラに命じる詩に次の句がみえる。「諸もろの闇を破り、光は虚空を照らす、  
いまやびるしゃなの清らの光が輝くべきとき」（拙訳）。南伝では卷十二、天子相應の第十「日天子」の、ラー  
フ（ラーフラではない）アスラ王に対する世尊の詩の「彼は盲闇の中に輝くもの、遍照にして周円熱火なり」に  
あたる。漢訳のびるしゃなに対応するのは「遍照」なのであるが、宮坂氏によれば「太陽 (surya) を形容し  
たものであつて、大乘諸經典にいうビルシヤナ仏ではない。が、この毘盧遮那という漢字訳は『六十華嚴』のそ  
れによるものと考えられる」。グナパドラの使った梵本にそうあつたのかもしれないが、訳文によるかぎり、南伝  
の「月天子」と「日天子」を月天子一つにひっくるめて文を短小にし、だがそこに日と見る方が普通の「びるし  
ゃな」を残して、わたしが省略的訳法と考えるグナパドラ訳文の特色がここにも見える。

同じびるしゃなでも、アスラの場合に車ヘンに卑の字を含む音写を使い、月（日）天子には華嚴と同じ音写を  
使つたのはグナパドラがその差別に敏感であり、訳文を受けとる中国人の意識をも充分に考えていたことを伺わ  
せる。以上でわたしの考察をおわり、あとは宮坂氏の「アスラからビルシヤナ仏へ」をかいつまんで紹介する。

華嚴では如来の名号は一万もあるとし、釈尊を特にビルシヤナと名づけ、この世界ではマールヤをビルシヤナ

仏の母とする。人間釈尊を神格化したものがビルシャナ仏であることを示す。

インドには古代王朝に日種と月種の二系統があるとされる伝えがあり、ゴータマ・ブッダのシャカ族は日種とされた。シャカ族が農耕種族で、母系社会制を温存し、その原初的信仰形態が太陽崇拜であったことは疑いなく、大乘經典作者は、この古伝承にVairocanaの観念を融合して「シガムニ・ビルシャナ仏」なる理念を表現した。

『華嚴經』以前のVairocanaのソースは、仏教外に求めねばなるまいが、西紀の前後約二世紀（四〇〇年）に成立したとされる叙事詩『マハーバーラタ』に現れるVairocana信仰に注目すべきだろう。そこには異系統の二つの神話が記録される。

第一。Virocanaを太陽神 (Sūrya, Aditya) と同格の神として扱ふ、「ヴィシシュヌ神の一千名」のうちに数える。ヴィシシュヌ神はアリアン民族のインド侵入後に奉ぜられた神であり、最古代にこの神が太陽神の神格をもつていたためであろう。

第二。VirocanaをAsuraの意味に用ゐる例が三十二回程認められ、AsuraとしてVirocanaとAsuraの子のVairocanaがSuresaすなわち神々の王たるインドラ (Indra 帝釈天) の敵対者として七回程登場する。ヒンドゥー教の説話集『ヴィシシュヌ・プラーナ』によると、昔インドラとアスラが烈しく戦い、最初インドラが勝ち、後にこの神の勢いが衰えアスラが勝つ。神々の請いによりヴィシシュヌ神がアスラを征服する。

さかのぼって初期の『ブラーフマナ』には神々もアスラもひとしく生主ヘブラジャーパティンの子孫であると説かれ、神々とアスラの闘争を繰返し伝える。勝敗はバラモン祭式に関する知識の有無により定まる。『アタル

ヴァ・ヴェーダ聖典』には、最高者の牡牛はアスラ達・祖靈・聖仙となり、神とアスラとの対立観念があらわれインドラとアスラという表現が見える。『リグ・ヴェーダ聖典』ではアスラは低級な鬼神とされず、最高神である天空神 (Varuna)、蒼空神 (Dyauis)、荒神 (Ridra) などの天空に関する神をあらわす。とくにアスラを代表するのは太陽の如く輝き雷を駆使するルドラであるとされる。アスラがもとはベルシャの『ゼンド・アヴェスタ聖典』にみえる光として表徴される「アウラ・マズダ」(Aurva Mazda) に由来することに関連するのであろう。インドラは後に神々の代表となりアスラと対立するが、古代ベルシャでは悪魔であり、ヘベルシャと戦うインド・アリアン民族の間で戦陣を守護する軍神として信仰されるようになり、後、ヘバラモンから異端視された仏教に取り入れられ守護の善神となった。歴史的にみると、神とアスラとの闘争神話は、インド・アリアン民族と土着原住民族との戦鬪の史実を反映し、階級社会の固定した時代には正統バラモンと反バラモンとの対立がこゝろした神話に託して語られてきたのであろう。

W. J. Perry によると、インド・アリアン族が文明をきずく以前にアスラ族 (Asuras) とドラヴィダ族 (Dravidas) とがあり古代文明を栄えさせた。アスラ族の首長は「日の御子」で、現北インドのナーガ族 (Nagas) は古代アスラ族の特徴を保存する。堀一郎氏はこれを継ぎ「印度のアスラは太陽神であり、それはドラヴィダ族の影響の下に於てはるかに後代まで持続し、コータナジプールのムンダ族、ゴンダ族、コンダ族の如きは今も日神を主要神乃至大神として崇拜している」という。これらによれば、原住アスラ族は太陽神 ASURA を祭り、後に ASURA-VITROCANA が結合され、さらに後に分裂しヒンドゥー教と大乘仏教においてこの古代信仰がそれぞれの形態をと

って復活したことになる。『マハーバーラタ』で、Virocana, Vairocana を神々に対抗するものと見るのは、インド・アリアン系、バラモンの宗教的伝統の立場を語るもの。他方、Virocana をヴィシシュヌ神の別名とするのは非アリアン系原住民の太陽神信仰の再生であると見てよからう。

『ヴィシシュヌ・ブラーナ』は「むかし神の代に、神とアスラとの戦いがあった。再生者よ。／そのとき、神々はフラダー (Hrāda) の教令で悪魔 (Daiya 即ち Asura) に打負かされたのであった」といい、アスラをそそのかし神々に戦いをいどんだものは「幻影によって欺く者」すなわち仏陀である。アスラはひとたびは神々を破るが最後に神々は、ヴィシシュヌ神の助けによりアスラを征伐する。だがこの「幻影によって欺く者」もヴィシシュヌの身体から生じたもの、したがって仏陀も、ヴィシシュヌの分身的顕現とする。ここでの破仏教・ジャイナ教の部分は西南インドのナルマダー河付近を舞台とし、仏教教理は中観と唯識が破せられるだけだから、体系的な密教成立以前であろう。現『ヴィシシュヌ・ブラーナ』は六世紀までに成立したといわれるから、華嚴系のビルシャナ仏信仰が行われていた時代を背景にしていると見られ、『ヴィシシュヌ・ブラーナ』がアスラの背後に神々の敵対者である仏陀を認めていることは、アスラの代表である Virocana, Verocana なるアスラの王 (Indra) とする古文献の伝承を蘇らせ結びつけたものと考えたい。次は佐藤任氏の『悲しき阿修羅』から。

チャットパーディヤーヤ Chattopadhyaya, D. はローカーヤタへ仏教でいう順世外道とよばれた古代インド唯物論に関する著作をアスラの世界観から書き始めた。一方、ダスグプタ Dasgupta, S. はアスラを古代シユメール人と考えた。インドの古文献ではローカーヤタの見解はアスラのもととされる。ダスグプタはローカーヤタの世

界を古代シュメールの世界観だと考えた。チャットパティヤーヤはダスグプタの見解は疑わしいとはするが、アスラを、アーリヤ人侵入以前のインダス文明の建設者とする。「リグ・ヴェーダ」の古注釈者サーヤナが「メール山頂にアマラーヴァティの都があり、神々が住む。メールのふもとにはアスラの都、イラーヴァティがある」というのがこれを証する。イラーヴァティは五河の一つ。五河地方にはピールーなる**茂**葉常緑樹林があり、そこに第六のシンドゥ河が流れ、その流域にアラッタなる地があり『マハーバーラタ』でパールヒカとよばれる。パールヒカは住民の名でアーリヤ人から嫌悪される。イラーヴァティ河付近で古代都市ハラッパ跡が発掘された。モヘンジョ・ダロと並ぶインダス文明の中心地である。「リグ・ヴェーダ」で、インドラがヴァラシカの子孫のヴリーチヴァット族を殺したハリュービーヤーはハラッパまたはその付近とされ、インドラは「アスラの殺害者」といわれ、ヴァラシカはサーヤナによつて特定のアスラの名と訳かれているから、アスラがインダス文明の創設者たることが推定される。

またシェンジ Shengge, M. J. は、最近発掘されたインダス遺跡の一つスル・コータダーは、本来の名はアスラ・コータダー（アスラの要塞）だ、という。アーリヤンの攻撃したインダスの都市はブル（Pur）。アーリヤンの軍神インドラはブランドラ（Brandara）ともプールヒッドゥ（Purhidu）ともよばれいずれも城の破壊者の意で、*pur* も *pur* も城壁をさす。ブラすなわち城市なる語はプールに由来し、壁で囲われていたことを物語る。

アスラは山窟、地底、地獄にすみ、そこに大きな都市があった。それらは黄金の都市、太古の光明の都市、自由の都市で、すべて建築技術者マーヤが建てたものである。アスラは海にも住んでいて、そこはヴァルナが支



配し、また空にも住んでいて、鉄と銀と金で造られた三つの華麗な城があり、そこから彼らは三界を攻撃した。アスラは戦いに強かった。樹木を倒し、敵に対して山頂を投げつけた。魔術に巧みで、いろいろな姿に変装し、姿を隠すことができた。彼らは咆哮によつて人を脅した。アスラの教師はシユクラ仙で、彼は神々からアスラを守る方法をシヴァより獲得した。(D. M. Bose「インド科学小史」)

右の三つの城はトリブラ (tripura) とよばれ、関連してトリブラ スンダリーという美しい女神がいて、アブサラス (水精の天女) ともドゥルガー (近づき難い女神) の別称ともされるヘアブサラスは楞伽經にラーヴァナの一族として現れる。

ブーナ大学のボーリングゲイによると、ボンベイの北にあるカムピアト (カンベイ) 灣のロータル港は、ハラッパと道でつながれ、この港はシユメールのウルと交通があった。シエンジェによれば『リグ・ヴェーダ』に悪魔の一種としてみるダーシャ (Dasya) 族は漁民で、漁業や商業のため船に乗り航行していた。ベンガルの漁民社会の人は今でもダーサ族と自称している。

『マハーバーラタ』にはアスラの諸種が記される。ダイティヤ (魔神)、ダーナヴァ (巨人)、ダスユ (未開人)、カールカンジャ (星の精)、カーレージャ (時の鬼神)、カリン (鯨)、ナーガ (蛇)、ビシャーチャ (生肉の食者)、ラークシャサ (夜の徘徊者) 等で、よく出てくるのはダーナヴァ (Danava) とラークシャサ (Rakshasa)、ラークシャサは漢訳では羅刹である。

アスラはマーヤー (Maya) に富める者といわれ、マーヤーは幻術・幻影などと解されているが、マクドノーネル

(Macdonell, A.) がしうように「英語の Craft (技能) と全く正確に対応し」、本来、創造力とそれにともなる技能を意味し、シェーンジエによれば、インダス文明を建設したアスラ族の創造力の典型的な事例は、城砦とダム建設である。百または九十九のアスラの城砦がインドラによって破壊されたと伝えられ、マヤー・ヴェーダー (māyaveda) すなわち建築学はアスラ・ヴィディヤー (asurvīdyā) すなわちアスラの知識であつて、単なる幻想ではなかつた。後に北西からインドに入ったアーリヤン (デーヴァ・神々) にとつて、アスラの技能は見ることでもない驚くべき力、幻力であつた。デーヴァがアスラと戦ひ、亡ぼし、インダス文明を破壊した後、この創造力は意味を変え、幻想的を呪力とされた。アーリヤンに追われたインダス住民の一部は北西に逃げ、マヤーの本来の意味は「アヴェスター」に保存され、アスラはアフラ・マズダのアフラとして日神・善神の意味を保存することになつたのではないか。インダス文明のアスラのシンボルの一つは驚の印章と考えられている有翼日輪で、これは太陽神アフラ・マズダのシンボルであり、同時にアッシリヤの太陽神アッシュールのシンボルでもある。モヘンジョ・ダロとハラッパーからの出土品に菩提樹や牛を刻んだものが多く、これもまたアスラにとつての聖なるシンボルだつた。

神話的生類はもと人間であつた。アスラ、ガンダルヴァ、ラクシャ、ヤクシャ、ビシャーチャが本来もつ人間の性質を剝奪された唯一の罪は、インド・ガンジス平野へのアーリヤ族の進出に反抗したことであつた。

インドラとヴィシュヌはアスラ族と戦つた。アスラを亡した後、彼らはアスラに言った。「われらに分割せよ」アスラは申し出を受け容れた。インドラはいう「ヴィシュヌが三步あるいた土地はすべてわれらのもの。他は汝

らのもの」。ヴィシユヌはローカ（世界）の至る所を歩み、ヴェーダを越え、ヴァーチユ（言葉）を越えた（ア  
イタレーヤ・ブラーフマナ）。ヴィシユヌがヴェーダを越え、ヴァーチユを越えたことは、アーリヤンがアスラ  
からその文化（ヴェーダ）と言語（文字）を奪ったことを意味する、との説もある。

『リグ・ヴェーダ』は初めアーリヤンのアスラに対する戦勝を描くに主眼があつた。後に宗教的に火を中心とす  
る祭りに作り変えた。シェンジェは、この変形に三つのことが重要な役割を果たすという。

- 1 リタ（天則）、宇宙と人倫の秩序の概念。アーリヤンが自らを勝者・善と認めるや否や、彼らは神々（デ  
ーヴァ）となり、被征服民は悪鬼とされた。リタの観念もアスラの基本的世界観であつたものをアーリヤンが  
奪つておのれのものとした。

- 2 善と悪との闘争という宗教観も、アスラの宗教からアーリヤンが借用したもの。

- 3 火の崇拜もアスラの宗教の重要な部分だったが、アスラに対する戦いでアグニ（火）がアーリヤンを助け  
たので、アーリヤンは自分の文明の建設にとりいれた。

こうして、敗れたアスラ住民は、アーリヤ社会構造の中で最低の地位を与えられ、新たに創られた宗教への参  
加を禁ぜられ、ヴェーダを読むことを忌避された。アーリヤ社会の外に逃れたアスラのかんりの者はイランとパ  
ルチスタンの山岳へ行き、ピシャーチャ族は北西の丘陵に逃れた。ピシャーチャは食肉鬼で非人間界のものとな  
れるが、北インドに定住し進入するアーリヤンに烈しく反抗したため、永遠の敵として烙印をおされた。かれら  
は彫刻・建築の技術をもち、後のガンダーラ美術の建設に関連があるうとする説がある。またあるアスラはカッ

チャヤサウシュトラへ向った。ダーサ族は東へ逃げ漁民となり航海商業にも従事した。ラクシャ族の一部はバルチスタン方面に留まり、あるものは南インドとランカーに行つた。ガンダルヴァ族とヤクシャ族は、アーリヤ社会構造内に定住した。

以上の諸説の中にはなお仮説の段階にあるものが多いことを佐藤氏もことわつていたので、取扱いに注意は必要であろうが、示唆に富む。次にアスラの一族のヤクシャにつき宮坂氏の「YAKSA考」を要約しておこう。

ヤクシャは、サンスクリットで *yakṣa*、*ṛṣa*、*bari* で *yakṣya*、アルダマーガディで *yakṣya* または *yakṣa* で、漢訳經典では「夜叉」「菓叉」等と音写する。

その名は『リグ・ヴェーダ』にしばしば現れるが性格は不明確。『アタルヴァ・ヴェーダ』ではラークシャサ、ナーガ、アスラ、マホーラガなどと同列におかれ、『マハーバラタ』ではガンダルヴァ、ラークシャサ、マホーラガなどと並列され、叙事詩には「ヤクシャ戦争の章」もあるが、いずれも神 (*deva*) とは明確に区別され、通常ヤクカは人肉を食うみにくい鬼神として登場する。仏教では一般に八部衆のうちに数え低級な悪鬼とみなす。

初期仏教ではヤクカは *devatā* (神性、神に準ずるもの) を指すが *deva* (神) とは区別し、人間ではないものとする。 *deva* はアリアン系の神格であり *devatā* は非アリアン系であろう。初期仏典で釈尊をよぶのに非アリアン系のヤクカまたはナーガ (*nāga*) で尊称とすることはあつても、神とよぶことは全くない。

四方を守護する四天王 (*Cātūro mahārāja*) すなわち持国天 (東) 增長天 (南) 広目天 (西) 毘沙門天 (北) のうち毘沙門天 (*Kiṣora*) の眷属はヤクカである。四天王という配置は仏教独特だが、北方守護神がクベーラで

その配下にヤクシャがいるのは叙事詩、ヒンドゥー教、バラモン法典などに共通する。北方に黄金の山がありクペーラがこれを護るので、侵入者をふせぐため大力無双のヤクシャを配下においたのか。ただ、クペーラとヤクシャの結びつきは起源は不明。

『ジャータカ』では、キムブリサ (Kimpurisa 即 Kinmara)、ヤッカ・ラッカサ (Rakkhasa)、神 (Deva)、ヤッカ・ラッカサ・ダーナヴァ (Dānava)、ガンダッパ (Gandhabba)、マホーラガ (Mahoraga)、ヤッカ・ピシヤーチヤ (Pisāca)、ヤッカ・ブータ (Bhūta) と並称されるが、天女、人間とは区別する場合がある。ヤッカが樹神であることを暗示し、あるヤッカはニグローダ樹の根元に住み、また林中に住み樹に登る。マカーデーヴァは菩提樹 (vatārukkha) に再生したヤッカである。菩薩が樹神に生れた話が幾つかあり、場所も雪山地方、川岸、ガンガー河岸、カーシー国の村の入口や都の墓地など。

ヤッカは、大力で財宝をもち、みにくく狂暴で、人を殺し人肉を食う、とされるが悪魔 (Māra) との区別は明かではない。女神ヤッキニー (バーリ Yakkini 或 Yaksini) との関係は不明確だが、樹木・森林と結びつき、人肉を食う点は共通する。後の仏教論書では、以上のほかに身形の大きいこと、行動の迅速なことなどを付け加える。

『スッタ・ニパータ』には釈尊が殺人鬼アラーヴァカ・ヤッカを教化した話があり、サータギラ・ヤッカ (七岳夜叉) とヘーマヴァトー・ヤッカ (雪山夜叉) との対話に見られるように釈尊をたたえるヤクシャもいる。

『大会経』でクペーラの供をして釈尊の会座に来たヤッカ達は、神力をもち、輝き、美しく、名声ある者として

いる。そのうち、光輝を有する (pūṭhita) という性格づけは重要だ。ジャイナ教文献に見えるジャッカも光輝にかがやく者であり、『リグ・ヴェーダ』のヤクシャも迅速な光として表徴されるから。

『スッタ・ニパータ』四七八に、*ettāvataṃ yakkhasa suddhi — tathagato arahati pūrajāsam*、これだけでもヤッカーサは清らかとなる——如来は祭餅を受けるにふさわしい、というほどの意、という。古注は *Yakkha* を *purisa* へ人々とするが、ヤッカを人間ならざるものとする一般規定と合わぬ。祭餅は本来バラモン教の用語である。仏教的に転用したのはとにかく、ヤッカに献供する意が背後にひそむだろう。すなわち献供の対象となるヤッカの神格の清浄性が如来の清浄性と献供に関連づけられている。また八七五、八七六にもヤッカーサすなわちヤッカの神性を *aggagā suddhiṃ* (最高の清浄) と述べている。

相応部經典には、「ヴァーサヴァよ、神々も人間たちも、あなたに帰依します。サッカよ、あなたの帰依するヤッカとは何者ですか」というマータリの問いに、帝釈天は、それは正等覚者 (*sammāsambuddha*) だ、と答える。神々の王なる帝釈天 (インドラ) すら帰依するヤッカは最高神格をもつ者であり、それが正等覚者だと釈尊がいうのだからヤッカ即如来即正等覚者の等式が成りたっている。如来、正等覚者は釈尊ひとりに限られず、不特定多数の存在が予想される。中部ニカーヤの「ウパーリ経」では「嗔愛を断つ覚者、祭らるべきヤッカ、無比なる最上の人、かかる世尊の、わたしは弟子である」と釈尊を単称でヤッカとよび、そこでは釈尊をナーガとも第七の聖仙 (*Isi*) ともよんでいる。第七の聖仙とは過去七仏の第七仏としての釈尊である。

ヤクシャ (またはヤクシー) 信仰は、生産儀礼との結合において認められるから、その原初形態は農耕文化の

所産であることは明らかで、*Yaksha* というサンスクリットの原語とその発生源は非アリアンまたは前アリアンである。したがって釈尊当時には種族社会の宗教の一つであったと思われる。

初期仏典に現われるヤッカに二面あり、一つは人肉を食う悪鬼で、現在のわが国でも夜叉といえ、みたく狂暴な鬼神としてイメージされている。だがこのようなヤッカ像は人身供犠の残滓であろう。人身供犠は生産儀礼の重要な一様式と解さねばならないから。

一つは善神としての面である。初期仏教では釈尊の会座をまもる守護神とされ、おかれて仏教美術では守門神として表現される。魔除けの性格が理解されよう。仏塔が杉本卓洲説にいうように樹木信仰に起源するなら、ヤクシャ像との結合は必然である。ヤクシャは村の入口の樹木にも宿る。人間・家畜・農作物を防衛する機能をもつのは、生命力を象徴するヤクシャの一側面であり、富や財産の神としてのヤクシャは生産儀礼の派生観念とみるべきだろう。光り輝く存在として登場し、如来・正等覚者も釈尊もヤッカとよばれることがある。光輝・清浄の観念は生命力の内容をなしていたものだろう。

このように最高尊格をもつヤクシャが、一方なぜ、みにくい鬼神に没落したのか。ここには古代インド史の秘密が隠されていると思われる。仏教興起時代は古代種族社会の族制解体期だった。非アリアン系農耕文化が生んだ生産儀礼の神格がアリアン民族の社会で変容したので、ヤッカは全く相反する二面性をもって初期仏典に登場し、しかも、最高神格をもつ本来のヤクシャの姿は片鱗をのぞかせるにすぎない。仏教興起時代が文化的にも激動期であったことが知られるとともに、その片鱗に珠玉の光が感ぜられる。

おぼさつばなことではあるが、これで紹介をおわる。宮坂氏の『インド古典論』には「MĀTANĠAと仏教」「HĀ-  
PĪTĪ考」「YAMĀNTAKA考」など関連する力作があり、参考になる。

アスラとアリアンとの対立闘争の全歴史とその神話化の上になつて、アリアンの立場から歌いあげたもの  
の一つ、しかも最も有力な物語が『ラーヤーヤナ』だ。非アリアンの側にある仏教側からは、その批判が出る  
のが当然で、現に初期仏典からいろいろな形で現れている。しかし南伝の經典では、アスラやヤクシャはアリア  
ンの眼で見た方向に描かれることが多く、もともと善美の方向で採りあげられたアスラやヤクシャも注釈者に  
よつて他のものにすりかえられ、すりかえられた方が正統視されるいきさつが、宮坂氏の両論考からも伺える。  
ランカーの上座部、あるいはひろく北伝をもふくめた小乗教団にアリアンの考え方、感じ方の浸透してゆくさ  
まが見とられる。小乗教団で起こつたことは、その批判者として出発した大乘教団でも、起らないという保証は  
ない。魏訳楞伽が巻頭にびるしゃなへの帰敬頌をかかげるのは、その底本となつた梵本が、内外のそのような傾  
向を根底から批判しようとし、またその批判に同感する人達に伝持されたことを、さらに訳者のボディールチも  
その系統の人だつたことを、物語るのではないか。

(九八五年四月二十二日)

※本号正誤 五頁一二行 何故泣くろ↓何処へ行く 一九頁五行 シエンジェ↓シエーンジェ

※前号正誤 二二頁九行 Verocana→Veroca 二二頁一行 チャードーギヤ↓チャーンドーギヤ 同頁二行 ヴ

アイローチャナ↓ヴィローチャナ

※前号三頁九行の「甲の長さ三〇センチほどの亀」の長さは直径ではなく、甲の山に巻尺をそわせた長さ、の由。